原　著

「境界例」と現代社会における欲望

若狭清紀*

"Borderline" and the Desire in Contemporary Society

Kiyonori Wakasa *

Abstract

This paper investigates the dynamics of desire in contemporary society, by regarding the increase of "borderline", a mental disorder, as a symptom of the trend of contemporary society. By referring to studies by two Japanese psychiatrists, the characteristics of the borderline existential state are suggested. They consist of three points: firstly, the avoidance of structural, systematic and normative properties; secondly, absorption in a world which consists of energy that deviates from the structural; and thirdly, yearning for dyadic relationships bare of roles and norms, but suffering as a result of such relationships. The spread of the borderline existential state has been caused by the fact that the development of a desire for recognition in contemporary society weakens symbolic order and raises desire for consummatory action. Under such circumstances, increased desire for an awareness of responsibility is desirable.

1．境界例の現代性

今日，精神医学や心理療法の領域では，「境界例」（ボーダーライン）という精神病理が注目されている．境界例に関する研究は70年代以降に急速に増えはじめ，同時に境界例という診断も増加してきているという．こうした，たんなる時期的な問題としての現代性にとどまらず，境界例という病態そのものが現代的な性格をはらんでおり，境界例が現代社会，現代文化との深い関連を持っているという指摘が多くなされている．

もともと境界例という名称は，精神病（とくに精神分裂病）と神経症という疾病分類の境界領域（ボーダーライン）にある症例というとらえ方によるものである．その後，これをひとつの臨床単位として，人格障害という概念でとらえることが一般化してきている．しかし，ひとつの臨床単位として認められたとはいえ，境界例の輪郭が明瞭になったわけではなく，むしろ既存の分類を脅かす境界的性格こそが，この病態の本質的特徴であるという見解もあるのである．

ところで，現代社会で進行している傾向を表す言葉として，「ボーダーレス」という語がよく用いられる．この語は，情報や経済的活動が国境を越えて展開しているという事態を表現する語として用いられるが，これとはニュアンスの異なった意味で使われる場合もある．それは，大人と子供，男と女といったような様々な社会的役割・規範にもとづく境界が，希薄化し不鮮明になり，境界を

*人間健康科学科

* *Department of Human Health Sciences*

越える相互浸透的現象が拡大してきているという事態を表現する用法である．ボーダーレスというのは，物事を明瞭に区別する境界が解体しているということを意味するわけだが，そうすると固定的な分類におさまりきらない境界領域上での現象が浮上してくることになる．こうした，現代社会における境界領域現象の浮上は，精神障害におけるボーダーラインの増加と，なにやら符合しているようである．このことは，境界例と現代社会・現代文化との間にある関連性を暗示しているように思われる．

現代社会での境界的現象の浮上，そして境界例という精神障害の増加，この2つの事態には，それらをもたらした共通の基盤が考えられる．その基盤を，現代における社会構造や文化の変容といってしまえばそれまでであるが，ここで問題にしたいのは，そうした表層的現象を形づくる，深層の力動的な過程である．それは，精神や社会を不断に構成している集合的な諸力のうごめきといったものであり，このような力は，欲望と呼ぶのがふさわしいであろう．

本稿では境界例を，現代社会で展開している欲望のうごめきを示す徴候としてとらえ，それを手がかりとして，現代社会における欲望について考察したい．論述は，まず境界例の症状と精神医学者による境界例研究を提示して，境界例の特質を把握する（2・3節）．つぎに欲望の概念と分析枠組を設定し（4節），現代社会における欲望の展開のなかに境界例を位置づけ（5節），最後に境界例が現代社会に問いかけることを考える（6節），という手順で進めていきたい．

2．境界例の症状

境界例という病態は，そもそもどのようなものなのだろうか．境界例に関するイメージをつかむため，まず，今日ひろく普及しているアメリカ精神医学協会による境界例の診断基準を見てみよう．そこには境界例の特徴的症状が示されている．

アメリカ精神医学協会が刊行しているDSM－III－R（精神障害の診断と統計のマニュアル－第III版－改訂版）では，境界性人格障害というカテゴリーがあり，つぎのような8つの特徴が記述されている．

第1は，不安定で激しい対人関係様式で，相手を過剰に理想化したり過小評価したりという両極端を揺れ動くという特徴をもつものである．

第2は，衝動性である．浪費，セックス，物質常用，万引，無謀な運転，過食などの自己破壊的な行為があげられている．

第3は，感情の変わりやすさ．正常の気分から抑うつ，いらいら，不安へと著しく変動するということである．

第4は，不適切で激しい怒り，または怒りの制御ができないこと．

第5は，自殺の脅し，そぶり，行動，または自傷行為などのくり返し．

第6は，著しく持続的な自己同一性の障害．自己像，性的志向，長期的目標または職業選択，もつべき友人のタイプ，価値観などの不確実さとして現れる．

第7は，慢性的な空虚感，退屈の感情．

第8は，現実のまたは想像上の見捨てられを避けようとする気違いじみた努力．

DSM－III－Rでは，こうした8つの特徴のうち5つをみたすということを，境界性人格障害の診断基準としている[1]．

さて，DSM－III－Rの記述は，われわれ素人が境界例のイメージをおおざっぱにとらえるには有用である．しかし，こうして列挙された症状を見るだけでは，境界例というのは一部の不適応者，異常者にのみ関わるものではないかという印象をもたらし，境界例と現代社会一般の傾向との関連が見出しにくくなってしまうように思われる．

そこで，境界例に関する理解を深めるために，日本の研究者による境界例に対する洞察力ある論考を参照していきたい．そのことによって，表面的な症状の把握にとどまらない，境界例患者の存在様態といったものの理解が得られるであろう．

3．境界例患者の存在様態

はじめに参照したいのは，木村敏による境界例論である．木村の境界例論を理解するには，まず「直接性」，「間接性」などの独特の用語法を把握しておく必要があるので，そこから見ていくこと

にしよう[2]．

われわれの日常的な経験は，われわれが生まれついた文化に特有の言語構造によって分節されていて，単純な知覚レベルにおいてさえ，「なになにとして」経験するという形で言語による規定を受けている．木村は，こうした言語体系による媒介性のことを「間接性」と呼んでいる．社会学的に重要な概念である「役割」や「規範」も，文化的・言語的な限定に基づく間接的なものとされる．

間接性を帯びた日常的経験は，言語的限定によって分節されているわけであるが，西田幾多郎のいう純粋経験のように，一切の思慮や判断が加わらず，自分がなにかを意識しているという意識以前の無反省の状態に心が漂っている時には，自己や他者，事物が一体となってなんの区別もない純粋な「直接性」の状態が成立する，と木村はいっている．たとえば，自分の好きな音楽に完全に没入して聞いている時に，音楽の流れと自分の心身の状態の流れとが一体となる，というようなことを思いうかべればよいだろう．また，文化人類学でいわれるような祝祭のさなかには，日常的な限定や差異が崩れ落ちて自然のままの衝動が沸き起こり「荒ぶる直接性」の状態が実現するという．このように，木村は直接性を，純粋経験という形と祝祭という形で例証している[3]．

木村は，直接性，間接性という経験の2つの様態を前提として，「自己」の成り立ちについても独特の議論を展開している[4]．自己が他者あるいは非自己と区別されて成立するのは，自己と非自己との差異を規定する言語的な差異体系によって構成される間接性の場所においてである．たとえば，事物に対する人間，男に対する女，親に対する子，学生に対する教師といったような諸々の差異の体系が，～としての私という規定を与えて，自己を成立させるわけである．

しかし，間接性の場所で限定される自己は，われわれ自身が自分の中心部において生々しい実感として生きている「この私」とは異なると木村はいう．そして，「この私」という主体的自己を構成する能動的な力の根源は，主客未分，自他未分の「根源的自発性」という直接性にもとめられる．ところが，この根源的自発性は，自他の区別以前に働いている働きであり，いまだ自己とはいえない．直接性においてでも間接性においてでもないとすれば，主体的自己の成立するのはどこなのだろうか．

木村は，主体的自己が成立するのは，直接性と間接性のあいだであるといっている．つまり，主体的自己とは，無差別の直接性を，差異体系における経験の間接性へと限定する限定作用ないし差異化作用そのものであるというのである．言語的な差異体系は，～としての私という規定を与えるわけであるが，そのつどそのつどの経験において，自己が様々なあり方で～として自己自身を限定する，その限定作用，差異化作用そのものが主体的自己ということになる．つまり主体的自己とは，限定作用，差異化作用という働きのことなのである．

さて，以上のことを前提として，いよいよ木村の境界例論を見ていこう．木村は，境界例の一般的特徴を「現在の直接性への没入」と表現している[5]．

境界例患者は，間接性の世界で自己が規定されることを忌避し嫌悪するという．木村の記した症例のなかから，境界例患者の間接性の忌避に該当するものをいくつかあげてみると，世間的ルールに従って行動する人々に対する攻撃的態度，常識という言葉に対する敵意，他人から自分の名前を呼ばれることに対する嫌悪といったものがある．境界例では，分裂病のように主体的自己の障害は認められないが，差異化の作用そのものである主体的自己が，差異化の結果として，差異体系の1項としての個別的自己という外見をとらねばならないということが，境界例患者にとっては耐えがたい苦痛なのだと，木村はいっている[6]．

自己同一性の成立が，言語的な差異体系による規定を不可欠の契機とする以上，そうした間接性を忌避する境界例患者は，容易に自己同一性の障害に陥る．DSM－III－Rでの自己同一性の障害という項目は，境界例患者の間接性の忌避という存在様態から理解することができる．また，慢性的な空虚感・退屈感という項目は，自分が忌避する間接性が，社会において支配的であるということによるものと理解できる．

木村によると，間接性の世界を忌避する境界例患者は，直接性の世界に没入しようとする．DSM－III－Rで2番目にあげられている物質常用，過食等の嗜癖行動は，直接性へと没入する行動の例といえるだろう．

このように境界例患者は，社会的な規定性を忌避し，直接性の世界に生きようとする．しかし，日常生活に適応しようとする限り，間接性の世界からの拘束を免れることはできない．したがって境界例患者は，間接性の世界での自己の個別性を忌避しながら，その反面でそうした自己の個別性が解体することに，あるいはそれが直接性の過剰に押し流されることに恐怖を示す．木村は，こうしたあり方を，境界例特有の悲劇的な矛盾といっている[7]．

以上，木村敏による境界例論を見てきたわけだが，つぎに，その議論の理解を深め，さらに新しい知見を与えてくれる鈴木茂による境界例研究を見ていこう．

鈴木茂は，境界例患者の特徴として，言語使用における感覚的・表出的用法の優越であるとか，イメージ記憶の過剰な想起，統合指向拒否傾向ということをいっている．

鈴木によれば，言語には，物事を客観的に指示し叙述する客観的・指示的機能と，話し手が主観的な感情や判断を表現して聴き手を情緒的にゆり動かす感覚的・表出的機能があり，境界例患者の場合には前者の不足と後者の過剰という特徴があるという[8]．感覚的・表出的機能の具体例としては，擬声語・擬態語および「すごく」などの極端化を意味する修飾語の多用，好き嫌いの頻繁な表明，あるいは話の流暢さや巧みな飛躍として示されるリズムなどがあげられている．境界例患者は，このような感覚的言語使用に巧みな反面，言語の社会的・慣習的な用法から逸脱する傾向があると鈴木はいっている．

イメージ記憶の過剰な想起というのは，現在の出来事に触発されて，類似の状況のイメージが情緒的雰囲気として強烈に想起され，現在の意識が過去のイメージ記憶によって浸潤されるという体験である[9]．

また統合指向拒否傾向というのは，境界例患者にとっての世界が，断片的な事象の絶えざる生起としてあり，断片的事象の統合をめざすことがないというあり方をいうものである[10]．

これらの特徴は，直接性への没入という木村の境界例論から見ると，どのように位置づけられるであろうか．木村の用語法からはややずれるかもしれないが，「間接性」が体系的，構造的なものによる規定のことであるとすれば，「直接性」は，体系的・構造的な規定を逸脱し，すりぬけていくエネルギーないし運動性としてとらえられる．このようにとらえると，言語使用における感覚的・表出的用法の優越，イメージ記憶の過剰な想起，統合指向拒否傾向といった特徴は，直接性の過剰なエネルギーによって，経験が体系化，構造化されないという事態を示すものだと理解できるだろう[11]．

鈴木は，境界例患者の対人関係上の特徴についても論じている．それは，「規範人」を忌避し「境界人」と2者関係をつくるというものである[12]．

「規範人」というのは，社会的秩序や規範を体現しているタイプの人々のことで，境界例患者は，規範人と表面的な関係しか結ぼうとしないという．この点は，木村のいう間接性の忌避に相当するといえる．

一方，境界例患者は，あまり規範に頓着しなかったり，規範からのずれを現実に生きているタイプの人々である「境界人」にはひきつけられ，社会的規範や役割に依存しない生身の2者関係をつくるという．この2者関係は，互いに競争的・破壊的なライバル意識を持つ相剋的関係や一方的な依存関係となり，相手の一挙手一投足に自分に対する好悪のしるしを読みとるという絶えざる緊張関係となる．

境界例患者は，生身の2者関係のなかで，嫉妬心や競争意識，依存したい欲求と相手にのみこまれる恐怖心など，様々な感情を錯綜させ，怒りや攻撃性を唐突にあらわしたかと思うと仲直りを求めるというような感情変化の激しさを見せるという．ここには，DSM－III－Rにある1・3・4番目の項目にあたるものが現れている．さらに，5番目の自殺の脅しや8番目の見捨てられへの恐怖というものも，生身の2者関係において生じる

のだと思われる．

鈴木は，こうした2者関係をつくる境界例患者にとっての他者を，J・ラカンのいう鏡像他者だとしている．そして，鏡像他者との不安定な関係から脱するには，同じくラカンの用語である象徴界に参入することが必要であると述べている．鈴木の説明では象徴界とは，「個人に先立って存在し，個人がその中で養育される秩序・枠組」のことであり，人間の文化・社会を構造化するものである．境界例患者は，象徴界への移行・参入につまずいているのだと鈴木は解釈している[13]．

さて，以上に見てきた木村敏と鈴木茂の境界例論から，境界例患者の存在様態についていえることをまとめておこう．第1に境界例患者は，構造的，体系的，規範的なもの（間接性，社会的規範，役割，象徴界など）を忌避するということがいえる．それと関連して第2に，境界例患者は，体系的・構造的な規定をすりぬけていく直接性の過剰なエネルギーを抱えていて，そうした世界に没入して生きているということがいえる．第3に，社会的規範や役割に依存しない生身の2者関係を求め，そこでの緊張関係に苦しむというあり方があげられる．ここでは，この3点を確認しておこう．

ところで，鈴木茂は境界例患者の象徴界への移行の困難さを，患者の家庭および社会全般の象徴的秩序の弱体化に起因するものと見ている．この象徴的秩序の弱体化という事態は，いかにして引き起こされたのであろうか．また，境界例的存在様態が増加しているとするなら，それはどのようにしてなのだろうか．こうした問いを念頭において，現代社会における欲望の動態を考察していきたい．だがその前に，欲望の概念と分析枠組を明らかにしておこう．

4．欲望の概念と分析枠組

まずはじめに，欲望とは行為者を行為へと駆り立てる力であると定義しておこう．しかし，ここで問題にしたい欲望は，たんなる心理的なものではなく，行為主体と社会的世界の両者を不断に構成する力でもある．欲望は，このような存在論的意味あいを持った概念として設定される．

欲望の存在論的意味について，例をあげて説明しよう．Aという人物が，知り合いからあるブランド品を見せつけられて，それまでまったく興味がなかったそのブランドの商品を欲しがるようになった，という状況を考えてみよう．Aには，ブランド品を所有するという行為へと駆り立てる力として欲望が作用したといえる．この欲望の作用以前には，Aにとって当のブランドは，気にもとめなかった無意味な記号でしかなく，その価値の高低についてもまったく知識がなかったとしよう．そして，この欲望の作用によって，Aは当のブランドに特別の意味を見出すだけでなく，さらにそのブランドを取り巻く他のブランド群の価値についても知るようになったとしよう．この場合，欲望はAにとっての世界の分節の仕方を変えたといえるし，また「ブランド品を求める私」という主体を構成したといえるだろう．欲望が行為主体と社会的世界を構成する力であるというのは，たとえばこういうことである．

いまの例では，1人の人物の生活の1局面に作用した欲望を取り出してみたわけだが，現実には同一の個人に多種多様なベクトルの欲望が複雑な連関をなして作用しているし，それらの欲望は，さらに他者に作用する欲望との間で錯綜的な連関をなす（ブランド品を見せつける行為へとAの知り合いを駆り立てた欲望が，Aにブランド品を求めさせる欲望を引き起こしたというように）．このように欲望は，個々の主体に帰属するものではなく，多様な諸力が社会的集合的に錯綜する連関性の場としてある．この力の場が総体として諸々の行為主体と社会的世界を構成していくのである．

欲望をこのようにとらえたうえで，つぎに欲望の具体的な作用を分析するために，欲望を3つの成分に分けてそれぞれを特徴づけてみたい．その際，欲望が行為主体を構成する力であることから，行為主体の構成契機を3つ考え，それを規準とすることにしたい．3つの構成契機とは，「運動性」，「アイデンティティ」，「責任」である．これらは，それぞれ木村敏のいう直接性，間接性，主体的自己に関連している．また欲望は，行為主体と同時に社会的世界を構成する力でもあるから，この3つの分類は，社会的世界を構成する3つの次元にも対応している．

さて，行為主体はなんらかの活動をする主体であるから，必然的に運動性という契機を有しているといえる．運動性とは，身体の運動性，知覚過程の運動性，思考やイメージの運動性などを指している．この運動性という契機に対応する欲望として，主体をより自由な運動性へと駆り立てる欲望が考えられる．これを流動性を求める欲望と呼ぼう．

流動性という語は，M・チクセントミハイのいうフローという概念に示唆を受けたものである．チクセントミハイによればフローとは，遊びや創造的活動などの行為に全人的に没入している時に感ずる包括的感覚のことである．フローの状態にある時，行為は，行為者の意識的な仲介の必要がないかのように内的な論理に従って次々に進行し，瞬間から瞬間への統一的な流れとして経験される[14]．流動性を求める欲望は，このようなフローへと向かう欲望といってよいだろう．

流動性を求める欲望の作用は，それぞれの行為主体に特有の運動性の様式を構成する．同時に，身体性の感覚，時間・空間の感覚といった，社会的世界を構成するマテリアルな次元を構成する．

自己を「～としての私」ととらえることに関わる「アイデンティティ」が，行為主体の第２の構成契機である．

安定したアイデンティティが形成され，維持されるには，自己が他者によって承認されることが必要である．ここで，アイデンティティという契機に対応する欲望として，承認を求める欲望を考えることができる．承認を求める欲望とは，他者によって自己の意義・価値が認められることを求める欲望である．この欲望の根底には，軽蔑されたり，嘲笑されたり，無視されたりといった形で，他者から承認されないことに対する恐れがあると思われる．

承認を求める欲望は，社会的世界の構成において，諸々の意味・規範からなる象徴的次元を構成する．なぜならば，意味や規範は，自己－他者関係における相互承認によって確認され，構成されるからである．

アイデンティティが「～としての私」という意識に関わるのに対して，行為をしているのは他のだれでもなく，「この私」であるという直覚的意識に関わるのが，第３の構成契機である「責任」である．責任とは，生の遂行が，他のだれでもないこの私に委ねられているということ，自己や他者，世界に対して，そのつどそのつどなんらかの態度を取ることが，この私に課せられているということである．この意味での責任は，主体が存立しているかぎり，主体のあらゆるふるまいにつきまとう原的事実であるが，たとえば人が死と対峙したときなどに，切実に問題となることである．

責任という契機においては，それを自覚的に引き受ける方向へと，主体を駆り立てる力が作用するように思われる．この力を，善性を求める欲望と呼ぼう．責任を自覚的に引き受けることは，善く生きるという姿勢をとることに他ならないからである．

善性を求める欲望は，具体的には自己の成長を求めること，自己の行いに配慮すること，他者のあるがままを尊重し，他者を愛すること等々の行為へと主体を駆り立てる．また，社会的世界の構成において，責任の自覚性の強度という倫理的な次元を構成する．

以上の３つの分類は，分析的なものであるから，現実の過程では３つの欲望の成分が複雑に絡みあって作用しているといえる．そこで最後に，異なった欲望の成分が絡みあう２つの場合についてふれておこう．

第１は，流動性を求める欲望と承認を求める欲望の関係である．流動性を求める欲望によって構成されるマテリアルな次元は，それだけでは統合を欠いた断片的で無秩序なものになるしかないだろう．これを象徴的な秩序へと統合するのが，承認を求める欲望なのである．承認を求める欲望は，社会的な相互承認関係において，場面に適した姿勢，身ぶり，発声，言葉づかい等々を定めることによって，マテリアルな次元を体系化，構造化して象徴的な秩序を編み上げる．また，流動性を求める欲望が自由に発現しうる機会を限定する（たとえば，遊びの時間・空間が限定されるというふうに）．このように，承認を求める欲望は，流動性を求める欲望を限定するが，逆に流動性を求める欲望は，象徴的な次元を逸脱し，すりぬける運動

性を生産し続けるのである（たとえば，象徴的な次元の構成に関わる言語においても，感覚的・表出的な運動性が客観的・指示的な体系性を攪乱するということが起きる）．

第2は，承認を求める欲望と善性を求める欲望の関係である．承認を求める欲望は，他者から承認されないことへの恐れを原動力として，他者からよく見られることへと駆り立てる力として作用する．この力は，自己が他者からよく見られるということへの執着を引き起こし，原的事実としての責任を忘却させ，そこから目をそむけさせるように作用する．善性を求める欲望は，承認を求める欲望のこうした力に対抗して，責任を引き受けるよう誘う力として働き，他者からよく見られることへのとらわれを解きほぐすのである．

5．現代社会における欲望の動態と境界例

前節で設定した欲望の分析枠組をつかって，境界例的な存在様態を増加させるようになった現代社会における欲望の動態について考察してみよう．

まず，現代社会に特有の欲望の作動の仕方について考えるため，比較の対象として，前近代的な伝統的社会における欲望について考えておこう．

伝統的社会では，子供から大人への社会的地位の変更が，イニシエーションの通過によってなされる．このイニシエーションは，欲望のあり方を転換させるものとして理解できる．図式的にいってみると，イニシエーションを受ける前の子供の欲望は，流動性を求める欲望が優勢であり，象徴的次元に統合されない自由な運動性の発動が追求される．承認を求める欲望は，いまだ象徴秩序へと差し向けられず，母性的な閉域にとらわれている．このような子供の欲望は，イニシエーションを通過することによって，象徴的秩序のなかで自分の地位と役割に応じた承認を求めるということが支配的な，大人の欲望へと転換するのである．

ところで，イニシエーションの持つ意味は，これだけにつきるものではない．イニシエーションの期間には，共同体から隔離されて山中や荒野に放り出されるといったような苦しい試練が課せられる．この試練は，擬似的に死を経験するという意味がある[15]．前に述べたように，人は死に対峙したときに，原的な責任に直面する．イニシエーションにおける死の経験は，責任を自覚させる力である善性を求める欲望が発動する契機を含んでいるのである[16]．イニシエーションにおける善性を求める欲望の発動は，そのひとつの現れとして，V・ターナーのいうコミュニタスを成立させる．コミュニタスとは，身分や地位の分化をともなう社会構造の次元を超えて，諸個人が全人格的に対峙する，自由で平等な人間関係のことである[17]．ターナーは，イニシエーション儀礼の修練者を，コミュニタス的特性を帯びる存在の1例としている．

イニシエーションのさなかで死を経験し，原的責任に直面する修練者は，イニシエーションの通過後には，濃密で重層的な象徴的秩序のネットワークに統合される．ここでは，イニシエーションを通して獲得された善性を求める欲望の力を背景にしつつも，象徴的秩序によって規定される地位や役割に応じた承認の追求への欲望が支配的となるのである．

このような伝統的社会の欲望のあり方に対して，境界例的存在様態を増加させている現代社会の欲望はどのような展開を見せているのだろうか．

近代社会は，イニシエーションを喪失した社会であり，子供から大人への過渡期としての青年期が成立することになった．現代では，青年期がしだいに延長していき，伝統的社会であったならばイニシエーションの通過によって達成されるはずの，象徴的秩序への全面的な移行は，その境界線があいまいなままに引き延ばされている．こうした状況のなかで，承認を求める欲望を象徴的秩序へと差し向けず（構造的，体系的なものの忌避），流動性を求める欲望の優勢な子供の欲望を抱き続ける（直接性への没入）という欲望のあり方が境界例的な存在様態であるといえよう．

それでは，現代社会における象徴秩序が，承認を求める欲望を取りまとめる凝集力を弱めてきているのはどのようにしてなのだろうか．ここでは，近・現代の日本社会における承認を求める欲望の展開過程から，この問題を考えてみよう．

近代社会に特徴的な承認追求の様式は，貨幣収入の増大や社会的地位の上昇を目指す競争である．日本近代において，この承認追求の様式は，まず

立身出世主義として現れた．見田宗介がいうように，立身出世主義は，「家名を上げる」「家郷に錦をかざる」というように，家郷の期待に応えるということを強力な原動力としていた．しかし，その競争原理は，よって立つ基盤である家郷をしだいにほりくずすものであった[18]．

家郷の喪失により孤立した家族が生み出されるなかで，家郷という準拠集団をなくした承認を求める欲望は，それを埋め合わせるものとして商品の獲得競争という形式に向かう．J・ボードリヤールが分析したように，商品は，社会的地位の差異を表示する記号として機能するのである[19]．こうして承認を求める欲望は，商品というメディアおよびその情報を与えるマス・メディアに準拠するようになる．

あらゆる生活領域への商品関係の拡大と，それにともなう承認追求のメディアへの準拠は，諸個人の孤立化，人間関係の希薄化，断片化という傾向を進めていく．こうした傾向の進展は，対人関係における相互承認をとおして構成される象徴秩序を，弱体化させていくことになる．ボーダーレス現象の発生は，現代におけるこのような象徴秩序の変容を背景にしているのである．現代社会の象徴秩序は，充実性を欠いた，たんなる外枠的なものとなってしまっている．承認を求める欲望が象徴秩序から離れる傾向は，こうした事情によるものと思われる．

象徴的な次元からの限定力が弛緩すると，流動性を求める欲望が勢力を強めることになる．現代社会での遊戯的，享楽的なものへの志向性の高揚が，このことを示している．流動性を求める欲望の発現の形式として顕著に認められるのは，個人的，孤立的なメディア・情報装置への接続によって，情報環境と戯れるというあり方である．

承認を求める欲望を象徴的秩序へと差し向けず，象徴的秩序からの限定を免れるような流動性を求め続けるという境界例的な欲望のあり方は，現代社会における欲望のこのような展開を背景にしているのであろう．

以上のように，境界例的存在様態が社会一般の欲望の動態に見合ったものであるとするなら，そこで適応している人たちと境界例患者の人たちとは，どこが違っているのだろうか．

鈴木茂は，境界例患者に欠けているものは，「あらゆる自己同一性や権威が虚構の産物であり，意味というもの自体がもはや一義的・普遍的には成立しえない，といった苦い認識」[20]であるといっている．この認識は，もはや承認を求める欲望が充実して満たされることはないのだという，あきらめを含んでいる．この認識を受け入れることのできない境界例患者は，まやかしではない本物の意味を求め，充実した承認が果たされることを求めて，生身の2者関係にひきつけられるのだといえよう．

ところで，現代社会において善性を求める欲望は，どのように発現しているのであろうか．現代社会では，伝統的社会でのイニシエーションのように，善性を求める欲望が発現する集団的で制度的な機会は失われてしまった．原的な責任への自覚をうながすイニシエーション的な体験，あるいはコミュニタスの体験は，個人個人が自分なりにしなければならないのである．河合隼雄の語るところによれば，このような個人的なイニシエーション体験またはコミュニタス体験がうまく機能しない人が心理療法を受けに来るのであり，とりわけ境界例と呼ばれる人たちには，コミュニタスへの希求の強さが見られるのである[21]．

6．境界例が現代社会に問いかけること

最後に，境界例が現代社会に問いかけることを考えてみたい．

境界例患者は，現代社会における役割や規範が充実性を欠いた，たんなる外枠的なものとなってしまっていることを，その症状によって身をもって告発しているのだといえるかもしれない．境界例は，正常に社会に適応したものが忘れている，あるいは，やりすごしている現代社会における象徴的次元の空虚性を鋭く問いかけているのではないだろうか．

今日，欲望は，象徴的次元での承認の追求を部分的にあきらめ，流動性を求めることに専念するというような動きをみせている．しかし，流動性に身をひたすというあり方は，充実した承認が果たされないことをつかのま忘れさせるだけである．

このことは，直接性への没入という存在様態をとり，流動性を求める欲望のエネルギーに衝き動かされて生きる境界例患者が，やはり身をもって示していることである．境界例患者は，流動性を求める欲望の力に身をまかせるだけでは，心の安定を得ることができない．そして，充実した承認を求めて生身の2者関係に向かい，その2者関係において苦闘することになる．この苦闘は，象徴的秩序という媒介なしに，他者に対して承認を求める欲望を投げかけるということによるものである．

問題なのは，弱体化した象徴秩序のなかで空虚感をいだきながら承認を求めることにせよ，生身の2者関係で承認を求めて苦闘することにせよ，承認を求める欲望にとらわれていることではないだろうか．このとらわれから解放されることが，現代社会の象徴的次元の空虚さを乗り越えることにつながるのではないか．

承認を求めることへのとらわれをときほぐす力は，原的な責任の自覚へと誘う善性を求める欲望である．現代社会の空虚さが癒されるためには，善性を求める欲望が，その力を強めていくということが望まれるだろう．かつて，善性を求める欲望の発現の場であった伝統的社会でのイニシエーションでは，それを通過したあとに充実した象徴秩序へ統合されることが約束されていた．今日われわれは，統合先のない永続的なイニシエーションを生きることをせまられているのかもしれない．

注

1）アメリカ精神医学協会編，高橋三郎・花田耕一・藤縄昭訳『ＤＳＭ－Ⅲ－Ｒ精神障害の分類と診断の手引第2版』医学書院，1988年，171－172ページ．
2）木村敏の研究に関する記述は，つぎのものによっている．木村敏『直接性の病理』弘文堂，1986年，１－35ページ．および木村敏『分裂病と他者』弘文堂，1990年，231－261ページ．
3）前掲『直接性の病理』17－22ページ．
4）前掲『分裂病と他者』248－250ページ．
5）同上，239ページ．
6）同上，254ページ．
7）同上，253－254ページ．
8）鈴木茂『境界事象と精神医学』岩波書店，1986年，46－48ページ．および鈴木茂『境界例vs.分裂病』金剛出版，1991年，87－88ページ．
9）前掲『境界事象と精神医学』，53－56ページ．
10）同上，121ページ．
11）穂苅千恵・小川捷之「生と死の欲動」(『岩波講座　現代思想3　無意識の発見』岩波書店，1993年)においても，「境界例における構造化されないエネルギー」が論じられている．
12）前掲『境界事象と精神医学』，42－43ページ．前掲『境界例vs.分裂病』49－53ページ．
13）前掲『境界事象と精神医学』，102－128ページ．
14）Ｍ・チクセントミハイ，今村浩明訳『楽しみの社会学』思索社，1979年，66ページ．
15）イニシエーションにおける擬似的な死の経験については，Ｍ・エリアーデが論じている．Ｍ・エリアーデ，堀一郎訳『生と再生』東京大学出版会，1971年．
16）中沢新一は，イニシエーションには「かぎりなく死に近づいていく儀礼や行をとおして，社会や生の意味をはるか遠景からとらえるような，自由な精神を身につける」という意味があるといっている．中沢がいう自由な精神とは，原的な責任を自覚した精神といえる．中沢新一『野ウサギの走り』中央公論社，1989年，404－405ページ．
17）Ｖ・ターナー，冨倉光雄訳『儀礼の過程』思索社，1976年．およびＶ・ターナー，梶原景昭訳『象徴と社会』紀伊國屋書店，1981年を参照．
18）見田宗介『現代日本の心情と論理』筑摩書房，1971年，185－215ページ．
19）Ｊ・ボードリヤール，今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店，1979年．
20）前掲『境界事象と精神医学』134ページ．
21）河合隼雄『生と死の接点』岩波書店，1989年，348－349ページ．